

シリーズ「グローバル・ジャスティス」第46回（2014年7月25日）

「ケアの社会は不可能ではない」

ファビエンヌ・ブルジュール教授 ボルドー大学ミシェル・モンテーニュ校

(Fabienne Brugère, Professeur de Philosophie à l'Université Michel de Montaigne - Bordeaux-III)

---

2014年7月25日、同志社大学グローバル・スタディーズ研究科が主催している連続セミナー・シリーズの第46回「グローバル・ジャスティス」が同志社大学志高館において開かれた。今回は、ファビエンヌ・ブルジュール教授をお招きし、「ケアの社会は不可能ではない」というテーマでご講演いただきました。ブルジュール教授は、ボルドー大学ミシェル・モンテーニュ校の哲学教授で、ボルドー都市共同体開発委員会の委員長を務めるなど、社会政策に深く関わっておられます。この2月には、『ケアの倫理——ネオリベラリズムへの反論』（原山哲・山下りえ子訳、白水社、2014。原著は、*L'ethique du care* (PUF, Paris, 2013) が日本でも翻訳・出版されました。今回の講演では、ネオリベラリズムに対するオルタナティブとしてのケアの倫理の社会構想についてお話いただきます。

まず、現代社会における3つの問題を指摘したいと思います。一つめの問題は、市場を中心とする価値観が、あらゆる制度や価値基準にまで浸透していることです。それは市場原理にはなじまない領域にまで拡大していて、人間は経済的活動原理に基づいて行動するような、ホモ・エコノミクスとして定義されています。誰もが企業人のような振るまいをするように求められおり、もしそのように装うことができなければ、自己投資や自助ができない存在として社会の中でいわゆる「負け組」とされ、さらにそれが自己責任と考えられてしまいます。続いて、二つめの問題は、自然とテクノロジーが混然一体となっている現代のカタストロフィについてです。それは核エネルギーの問題であり、チェルノブイリやフクシマの事故とどのように対峙していけばよいのかということです。三つめの問題は、社会の再構築の問題です。社会の高齢化にともなって、従来の働く／働かない期間が大きく変容してきています。そのことをどのように考えるかということです。

このように社会が抱えている問題に対して、ケアの倫理は批判的に社会のあり方を模索しています。その軸となっているのは、ケアすることを中心に据えて社会を批判的に見る方法です。この考え方は、1980年代以降の経済を中心とした合理性の問いなおしにつながっており、資本主義や新自由主義に対抗しながら、高齢社会に応えるような、政治哲学の新たな展開だと言えるでしょう。それは、私的な連帯と公的な連帯を交差させ、新しい社会の枠組みを提示します。今日は、3つのことについてお話します。まずは、ヴァルネラヴル（傷つきやすさ）について、そして平等について、最後に新しい政治や公共政策についてです。

ヴァルネラブルについて、合衆国の政治思想家でケアの倫理を論じているジョアン・トロントは、ケアされる人・ケアする人のヴァルネラビリティが社会の周縁に追いやられていると論じています。人はみな傷つきやすく、ニーズをもっている存在であるとする人間観は、自己マネジメントのできる企業家を最優先する市場原理に基づいた人間観によって、ないがしろにされています。ケアを重視する見方から、トロントはケアされる・する関係についても批判的に検討しています。まず、ケアをする人の優位性と、その力の濫用をどのように考えるかという問題提起です。つまり、ケアされる人のもっているニーズを、ケアする人が勝手に決めてしまう可能性をどのように考え、ケアされる人の立場を忖度しながら、その他者性を確保するのかということについてトロントは論じています。日本の作家である小川洋子の『揚羽蝶が壊れる時』には、そのような他者性の構築がよく描かれていると言えるでしょう。続いて、ケアする側の人々のヴァルネラビリティについて。ケアする仕事は、女性、中でも移民労働者の女性へ任されることから分かるように、さらにヴァルネラブルな存在へと移譲されていきます。そこには傷つきやすさの連鎖と呼べるようなものが発生するのです。このようにヴァルネラビリティを深く抱え込んでいる人々は、一体どのようにして公的な世界に参加することができるのでしょうか。

つづいて、平等についての話にうつります。依存や相互依存のあり方をもとにして、平等を考えることは、民主主義そのものを再考することにつながります。他者への配慮を重視し、政治から排除しないようにするケアの政治は、民主主義的な実践の中での平等のあり方を新たにしていくものです。合衆国の心理学者・倫理学者のキャロル・ギリガンが『もう一つの声』で述べている、声の平等は、まさにそのことを提起しています。ヒエラルキーや差別の二重性に抵抗するケアの倫理は、その社会批判的な側面が特に重要です。弱い立場におかれた人々の声に配慮することが、声の平等を実践していく方法です。

最後に、ケアの倫理やフェミニズムが公共的政治においてどのような意味をもつのかということをお話したいと思います。合衆国のフェミニズム理論、政治思想家のナンシー・フレイザーは、産業資本主義や核家族モデルを鋭く批判しています。彼女は、公的なものと私的なものとの関係を問いなおすために、ケアについての二つのモデルを検討します。まず一つめは、家庭の外で賃労働としてケアをする人たちに任せる方法です。しかし、このモデルの場合、社会の下層の人たちにケア労働が移譲される傾向があります。二つめのモデルは、家族ケアに対する手当です。しかしこの場合、ほとんど女性がケアを担うことになるという問題点があります。フレイザーはこれらのモデルのどちらでもない第三のモデルとして、男性も女性も、働く時間とケアする時間を協力して作り上げていくことを主張しています。女性のあり方やケア労働のあり方は決して一つではありません。

以上が講演の主な内容です。

文責：對馬果莉